舌に発生した孤立性神経線維腫の1例

小野 貢伸・西 方 聡・井上農夫男
河村正昭・向後隆男*・雨宮 璋*

A case of solitary neurofibroma of the tongue

Mitsunobu ONO・Satoshi NISHIKATA・Nobuo INOUE
Masaaki KAWAMURA・Takao KOHGO*・Akira AMEMIYA*

Key words: neurofibroma (神経線維腫), solitary (孤立性), tongue (舌)

緒 言

神経線維腫には von Recklinghausen 氏病の部分症状として生じる場合と、孤立性に生じる場合とがあるが、いずれも口腔内に発症することはまれである。今回われわれは、舌に孤立性に生じた本症の1例を経験したので報告する。

症 例

患 者：38歳 女性。

主 訴：舌背部腫瘍。

家族歴：特記事項なし。

既往歴：特記事項なし。

現病歴：1週間程前より右舌背部の腫脹を自覚し、近医内科より紹介され平成3年4月■日当科を受診した。

現 症：体格中等度、栄養状態良好で、顔面および全身皮膚に異常所見は認めなかった。口腔内所見では、右舌背部に半球状の腫脹を認めた。被覆粘膜には異常所見を認めず、触診により粘膜下に20×13 mm、弾性やや硬の腫瘍を触知した(写真1)。

臨床診断：舌背部良性腫瘍。

処置および経過：平成3年7月■日全身麻酔下に腫瘍摘出術を行った。手術所見では粘膜直下に薄い被膜に包まれた類球形の腫瘍を認め、周囲組織との剝離は容易で

写真1 初診時口腔内写真

写真2 摘出物剖面

あり、腫瘍を一塊として摘出することができた。術後1年が経過した現在、再発などの傾向なく経過良好である。

摘出物所見：摘出物は19×12×16 mmの類球形で、表面は滑沢、淡黄白色を呈していた。断面は乳白色で、

北海道大学歯学部口腔外科学第二講座

(主任：河村正昭元教授)

* 北海道大学歯学部口腔病理学講座

(主任：雨宮 璋教授)

The Second Department of Oral and Maxillo-facial Surgery, School of Dentistry, Hokkaido University (Chief: Prof. Masaaki Kawamura Rtd.)

* The Department of Oral Pathology, School of Dentistry, Hokkaido University (Chief: Prof. Akira Amemiya)

受付日：平成4年8月20日

写真3 病理組織像 (H-E 染色, $\times 70$)

充実性であった (写真2)。

病理組織学的所見：摘出物は表層を上皮に覆われた組織で、筋層を介して下方に、充実性に増殖している腫瘍組織が認められた。腫瘍細胞は比較的淡明な楕円形の核と紡錘型の細胞質を有する細胞よりなり、これらが束状に配列していた (写真3)。鍍銀染色標本では腫瘍細胞間には膠原線維は比較的乏しく、波状に走行する好銀線維が認められた。抗 S-100タンパク抗体を用いた免疫染色の結果では、腫瘍細胞の胞体に S-100タンパク陽性所見が認められた。

病理組織学的診断：神経線維腫。

考 察

神経線維腫はシュワン細胞と神経鞘の間葉系細胞由来する腫瘍と考えられており、身体各部の皮膚および皮下に生じ、口腔ではまれとされている¹⁾。本腫瘍が口腔内に発生する場合、von Recklinghausen 氏病の部分症状として現れる場合と、孤立性に発生する場合とがあり、その比率は、Wright ら²⁾は本腫瘍の60%が von Recklinghausen 氏病に関連していたと述べており、また、それとは反対に Cherrick ら³⁾は19例中15例が孤立性であったとし、Shklar ら⁴⁾は口腔内に生じた本腫瘍16例中11例が孤立性であったと報告している。本邦では坂下ら⁵⁾が10例の口腔内の孤立性神経線維腫の報告を集計しているが、われわれが渉猟し得た範囲では、本症例を含めて22例の報告があり、性別では男性8例、女性14例と女性にやや多い傾向がみられ、年齢は11~62歳、平均35.6歳で、30代7例、20代5例と20代、30代に多くみられた。発生部位では舌8例、口唇7例、下顎骨4例、口蓋3例と舌に多くみられた。その中で舌背部に生じたも

のは本症例を含め4例で、他の3例は舌側縁、1例は舌下面であった。

孤立性の神経線維腫は緩慢に成長し比較的限局性であるが、被包化されていない腫瘍であり⁶⁾、Cherrick ら³⁾は被膜がみられたのは本腫瘍の4%にすぎないと述べている。本邦では3例において、病理組織学的に被膜が認められたと報告されている。本症例は不完全ではあるが薄い線維性の被膜に包まれていたが、一方、腫瘍組織内の一部に残存する筋組織が認められ、本腫瘍の発育は緩慢ではあるが周囲にび慢性に増殖することが示唆された。

本腫瘍の治療としては摘出術が行われていることが多く、柳沢ら⁷⁾は姑息的切除により再発した1例を報告しているが、他に再発の報告はみられず、予後は比較的良好である。本症例も摘出後1年を経過した現在、再発を認めていない。

結 語

38歳女性の舌背部に生じた孤立性神経線維腫の1例を経験したので、その概要を報告した。

本論文の要旨は、第18回日本口腔外科学会北日本地方会 (平成4年6月、新潟市) において発表した。

引用文献

- 1) 石川梧朗監修：口腔病理学Ⅱ。改訂版、永末書店、京都、1982、592-593頁。
- 2) Wright, B.A. and Jackson, D.: Neural tumors of the oral cavity. *Oral Surg* 49: 509-522 1980.
- 3) Cherrick, H.M. and Eversole, L.R.: Benign neural sheath neoplasm of the oral cavity. *Oral Surg* 32: 900-909 1971.
- 4) Shklar, G. and Meyer, I.: Neurogenic tumors of the mouth and jaws. *OS OM OP* 16: 1075-1093 1963.
- 5) 坂下英明, 宮田 勝, 他：舌に発生した孤立性神経線維腫の1例。日口外誌 34: 2637-2640 1988.
- 6) Richard, D.: Neurofibroma of the oral cavity. *Bri Oral Surg* 21: 36-43 1983.
- 7) 柳沢繁孝, 大竹弘司, 他：口唇部に発生した神経原性腫瘍の5例。日口外誌 31: 325-330 1985.